

# 豊明希望チャペル礼拝

2026/1/25

「すべての人をあわれむため」

ローマ人への手紙 11：25～32

今日の箇所に、こういう言葉があります。

「奥義」です。この箇所(最初の聖句)を読みます。

「11:25 兄弟たち。あなたがたが自分を知恵のある者と考えないようにするため  
に、この奥義を知らずにいてほしくはありません。イスラエル人の一部が頑なになつたのは異邦人の満ちる時が来るまでであり、」例によって、今どき AI に、この奥義とは何かと聞くと、以下のように出ます。

「「奥義」とは、学問や武術など特定の分野において、最も奥深く、重要な技術や知識、またはその真髄を指します。「奥義」は、ある技術体系や知識体系の中で、特に深く極めた際に得られる技術や知識を意味します。これは「極意」や「秘伝」といった言葉と同義で使われることが多いです。」

秘伝と同義だというごとく、私たちのイメージでは、このことばを聞くと、ラーメン屋の店主が決して明かさない、秘伝のスープとか、店が焼けても、秘伝のスープだけは、あるいは、そのスープのレシピ(作り方を書いたもの)だけは、命がけでもって逃げよというような、門外不出のきわめて大切な教えというような意味で使いますよね。

私は、このことばを聞いて、少なくとも、この数か月教えられてきた、ユダヤ人か異邦人かという神の知恵、思いのなかにあるものについて、また、広くは、それが書かれたこの聖書を、どれほど、私は、そのくらい、大切に思い、何があつても、この真理だけは、守りたいという程のもの、すなわち、秘伝、奥義として理解しているだろうか、少なくとも、驚いているのだろうかと、自らを省(かえり)みたことありました。みなさんはどうですか？

今日の箇所(および、次回の 36 節までは、9 章からのユダヤ人と異邦人のテーマのまとめであり、特に 11 章から始まった、神に一度は捨てられたユダヤ人であるが、異邦人の救いの後、きっと彼らも救われることになるという神の計画、これがすなわち、今日の箇所に秘儀の中心であるけれど、その神の奥義なることをまとめた箇所になります。その中心は今、言いましたように、神の計画に関してであります。特に異邦人が救われて、それに嫉妬を覚えたユダヤ人が、私もという思いが出て、結局そのようにして、すべての人が救われるという事であります。

そのまとめは、この聖句にあろうかと思います。今日の中心聖句です。

「11:32 神は、すべての人を不従順のうちに閉じ込めましたが、それはすべての人をあわれむためだったのです。」

先ほど申しました、この教え、奥義を、大切に思い、あるいは、驚いているだろうか、感謝しているだろうかという点において、パウロの驚きの一つに、このユダヤ人が捨てられ、異邦人が選ばれ、ついにユダヤ人も救われるという、この秘儀、奥義の、重要なポイントは、要するに、ユダヤ人も異邦人もみんな救われるという点です。すべての人が救われるというのが、驚きであり、奥義だ、神が究極的に考えておられたことだという点の驚きなんだろうと思うのです。

今一度、そんなことを思いながら、すでに、今日の内容は、今までのまとめであり、そういう意味では、繰り返しになりますから、細かくは触れませんが、今一度、そういう目で、今日の箇所を全部読みますので、聞いていただき、大切に思い、驚いていただければと思います。

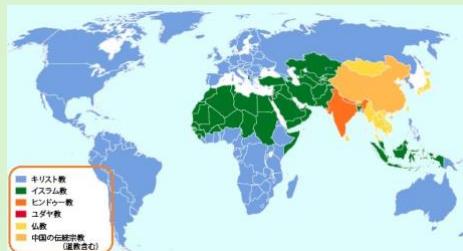
「11:25 兄弟たち。あなたがたが自分を知恵のある者と考えないようにするために、この奥義を知らずにいてほしくはありません。イスラエル人の一部が頑なになったのは異邦人の満ちる時が来るまでであり、11:26 こうして、イスラエルはみな救われるのです。「救い出す者がシオンから現れ、ヤコブから不敬虔を除き去る。11:27 これこそ、彼らと結ぶわたしの契約、すなわち、わたしが彼らの罪を取り除く時である」と書いてあるとおりです。11:28 彼らは、福音に関して言えば、あなたがたのゆえに、神に敵対している者ですが、選びに関して言えば、父祖たちのゆえに、神に愛されている者です。11:29 神の賜物と召命は、取り消されることがないからです。11:30 あなたがたは、かつては神に不従順でしたが、今は彼らの不従順のゆえに、あわれみを受けています。11:31 それと同じように、彼らも今は、あなたがたの受けたあわれみのゆえに不従順になっていますが、それは、彼ら自身も今あわれみを受けるためです。11:32 神は、すべての人を不従順のうちに閉じ込めましたが、それはすべての人をあわれむためだったのです。」

26 節で、「イスラエルはみな救われる」と言い、28 節に到って、イスラエルから始まった救いは、一度は捨てられたが、アブラハム以来の父祖以来、神に愛されてきたイスラエルは、結局、最後は救われる事になると言います。そして、29 節で、神がユダヤ人に約束したことは、神が一度約束したことを取り消すことはないのであってと言い、異邦人が、その罪にかかわらず、愛され救われたように、その同じ愛によって、一度は不従順になったが、あわれみを必ず受ける、あわれみは変わらないと言い、こうして、異邦人も愛された、ユダヤ人も愛された、結局全人類が愛され、これが奥義、ここでの奥義という意味は、神の秘密、神が心で考えておられたことという意味に使いますが、その奥義だ、神の究極の思いだと言うのです。

驚きでしょうか。

別の言い方をしましょう。この教えは、言わば、世界宗教になるといっているのです。この世界に世界宗教と言われる、これだけが唯一の真理だと言われる真理はあるでしょうか。たいていの宗教は民族と深く結びついています。

これも、AIによれば、「世界宗教とは、人種や民族を超えて世界規模で信仰されている宗教を指す。こんにち、世界宗教とみなされているのは、キリスト教、イスラム教、仏教の3つです。これらは「世界三大宗教」とも呼ばれています。」となります。そのうち、キリスト教が世界でもっとも信者が多く、



こう言います。「世界ではキリスト教の信仰者が圧倒的に多く、世界の人口の約35%から37%を占めると推定されています。」

地図をみていただいて分かるように、キリスト教は、35%と言いながら、イスラム教は、アラブ圏と、アフリカ北部にかたより、仏教は、アジアにかたよっていることが明確です。他の地域でも、信じられてはいますが、キリスト教が、アジアでも、アフリカでも多く信じられていることに比べると、他の宗教が、かたよっていることに気づくのではないでしょうか。

数の上でも、地域的な広がりという意味でも世界宗教とよべるのは、やはり、キリスト教だと言うことにならないでしょうか。

私は、今、この時代に生きる者として、神の奥義、神の思い、それは、パウロが2000年前に言った、「それはすべての人をあわれむためだったのです。」すなわち、福音がすべての人に伝えられ、すべての国民、民族に開かれている、そして、実際的にも信じられているというのは、その神の思い、計画である神の奥義が、現実となっているという驚きを感じないでしょうか。

今日は、残された時間、以前にも少し、触れましたが、広岡浅子（1849～1919・・17歳で結婚した時にはまだ江戸時代）という人物に触れたいのです。彼女は、本気で、キリスト教こそ、聖書こそ、世界を救うと考えていた人だと私は思っているのです。

彼女もまた、聖書こそ、驚きであり、人類が知るべき奥義だと驚いた一人でした。

この写真は、NHKの朝ドラ『あさが来た』です。2015年から放送され、平均視聴率は23.5%、連続テレビ小説としては今世紀最高の視聴率を記録したそうです。このドラマの主人公が、広岡浅子です。本人はこんな感じです。



ドラマの内容も含めて、どういう人かまず、触れると。いわゆる三井財閥の人々



の生まれで、旧姓は、三井浅子と言いました。そんな関係で、大阪の財閥である広岡家に嫁に出されて、ドラマでは働かない夫に代わって、彼女が、広岡家を支えることになります。九州の石炭の鉱山(後に、八幡製鉄所を支える炭鉱となる)を、彼女が、

荒くれ者の坑夫たちを、拳銃をもって従わせるようなリーダーシップを発揮します。

明治の大阪では、「大阪社交界の女王」とも呼ばれ、また、彼女こそ大阪実業界の光だとも言われて、大阪の商人達を助けリードします。エピソードとして、「伊藤博文、桂小五郎(木戸孝允:たかよし)らの邸宅を訪問するに、玄関から応接間をすかずかと進んで、主人の居間に入って、政治談義や外交談義を始めるような女である。君子危うきに近寄らずで、だから、彼女を避けている人達が多い。」と紹介されるような女性でした。そして、朝ドラでは触れませんでしたが、商才に秀でた彼女が、最後に到達したのは、聖書であり、キリスト教だったのです。



10年前、朝ドラが開始されたとき、彼女がクリスチャンだということは聞いていましたが、調べても、あまりよく分からなかった。そんな時、彼女が書いたというか、キリスト教雑誌に掲載した、彼女の書いたものがまとめられた本があるという事で、『一週一信』(1918年)という本らしいが、古本でも見つけることが出来なくて、国会図書館にコピーを依頼して、全部印刷して読みました。私は驚きました。彼女が、クリスチャンとしても筋金入りのクリスチャンだということが分かったからです。

彼女は、62歳でクリスチャンになりました。既に商売人としてバリバリやっていた時代です。しかし、そんな彼女が、聖書を読んで衝撃を受けるのです。

鉱山開発、銀行設立、クリスチャンになってからは、東京女子大学の設立、YWCA創設、ヴォーリズ設計への資金援助などをしたこと・・しかし結婚と挫折などの一通りの自己紹介をした後、神様の特別なおぼしめしがあって、

守られてきたと自己紹介し、彼女は、週2回、牧師の所に通い、勉強会を始めた。哲学宗教などを学び、25回の講義を終えたところで、「牧師が申されるのに、だいぶわかってきたようだから、そろそろ聖書を開いても良かろうと、聖書を手にすることとなりました。」(p15)と、はじめて聖書を読むことがゆるされて、聖書を読みます。まあ・・まさに奥義、秘儀扱いですね(教会に来た人にいきなり聖書は渡さない方がいいかも・・?)。聖書は、確かに神の言葉そのものですから、そろそろ聖書を開いてよ

ろしいという許可が出たということあります。最初はわからなかったが、祈りに御言葉に集中するうちに、突然、神に触れるような体験をしたとこう語ります。「絶対の神に触れた思いがした。思わず涙、とうとうとして流れ、止むところ知らぬという有様になりました。60 余年の今日まで、親に別れても夫に死なれてもかつて、涙ひとつ落とさず、我ながら強情にあきれざるをえないわたくしが、はじめて感涙に催されざるをえなかつたのは、実に不思議で、宇宙には神様居ますという感は、この時から取り去ることができないものになりました。」(p 22) と。大阪教会で洗礼を受けたとき、牧師は彼女のために祈りました。「・・・よわい 60、多くの人は、碌々 (ろくろく) として引退なすべき時にあたり、老婦は憤然と立って、神の道に学び、残る生涯を神に献げる決心をなし、すなわち今日、共に、バプテスマを受けたまいことを、まことにありがたく感謝たてまつる・・・」と。彼女は、聖書こそ、人類を正しく導く知恵だと悟ります。クリスチャンは地の塩世の光だと鼓舞し、青年は、クリスチャンとなつて、世に進出せよと命じます。「私共は今や此の誤れる時代遅れの軍国主義に対して闘ひを挑むべき時ではあるまいか。(中略) 我らクリスチャンは、・・・力を尽して使徒パウロが欧亜の二大陸に伝道したような、攻勢的な伝道をやる必要がある。これが即ち基督教の軍国主義に対する挑戦の根本的態度である」と。(原文のまま・・p96)。あの軍国主義の時代に、そうではなく聖書だと声をあげた女性がいた、聖書こそ真理であり、聖書によって日本が救われるという考えたクリスチャンがいた。この、聖書の教え、その奥義に対する驚き、その驚きを、信仰とし、実行としていかなくてはならないと言った。最初に聞いました。パウロが奥義だ、驚きだと言った、この神の御心、聖書に私たちは、どのくらい驚いているだろうか。使徒の働きを読みます。

「4:12 この方以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人間に与えられていないからです。」

キリストこそ、神の奥義。福音こそ、この時代に伝えねばならない奥義。この週、世界で起きていること、そして、私達の生活に、起きること、そのすべてにおいて、神が、キリストが解決をもつていること、この福音にこそ解決がある事を知って、神に頼り、神に祈り、感謝のうちに進むこの週でありたいと願います。